【書評】「分有の特異点としての文学:フェティ・ベンスラマ『物騒なフィクション』を巡って」『図書新聞』1995年2月25日2235号

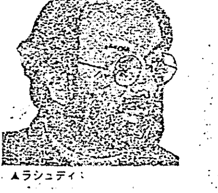
ラシュディ『悪魔の詩』がつきつけたもの　フェティ・ベンスラマ『物騒なフィクション』をめぐって

図書新聞 2235号
発行――(株)図書新聞 ©
電話 03-3234-3471(代)
定価240円（本体233円）
THE BOOK REVIEW PRESS
1995-2-25(土)

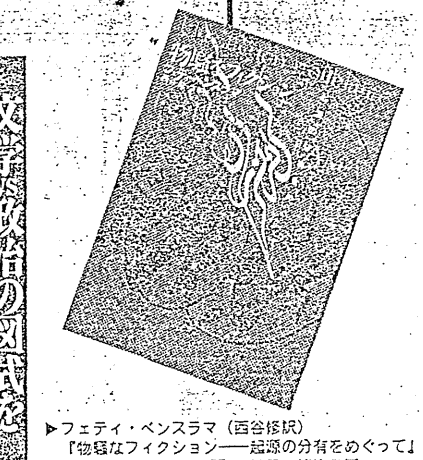
「分有」の特異点としての文学

文学は無罪か

いかに根源の唯一なるものを分有することが可能なのか。問いは開かれたままだろう。


▲ラシュディ

稲賀繁美
inaga shigemi
・比較文化


▶フェティ・ベンスラマ（西谷修訳）『物騒なフィクション――起源の分有をめぐって』
12・20刊　四六判128頁　1900円　筑摩書房

文学と政治の図式を乗り越えて

「文学作品とは危険を犯してこそ生み出されるものであり、とことんまで、それ以上もはや続けられなくなるところまで、突き詰められた経験の所産なのです」。モーリス・ブランショが『文学空間』に引用したライナー＝マリア・リルケの言葉。そこから今何が聞き取れるか。チュニジアの精神分析医、フェティ・ベンスラマの『物騒なフィクション』は、この言葉を転轍器として、サルマーン・ラシュディの小説、『悪魔の詩』の周辺に発生した事件の意味を問い直す、最も突き詰めた白熱の考察として看過しえない。

この小説の翻訳者が暗殺されながら、文学者が正面からこの一件を取り上げることになお躊躇を見せることが多い日本。この国で、いま本書が訳されたことの意義はどこにあるのか。まずこれまでの多くの議論が無条件の前提としてきたふたつの常識がここで真っ向から突き崩されていることに注目したい。第一に「表現の自由」にまつわるイデオロギー。文学は不可侵の特権的領域だ、政治や宗教による侵害からは確固として擁護されるべし、との立場は、逆にかえって文学を矮小化する。文学はしょせん絵空事に過ぎず、人畜無害だと棚上げするからだ。第二に、「ラシュディは有罪か」、「『悪魔の詩』はイスラーム冒瀆か」といった問いそのものの有効性も根底から疑問に付される。罪状確定の根拠を問うたとて、もはや覆水盆に帰らず。失われた数十人の命は戻らない。むしろ、多くの信徒たちが、小説を読むことを断固として拒絶したその姿勢を直視したい。この拒絶が実際に大規模な社会的な抗議を担ってしまい得た。この現実的効果こそがベンスラマの「精神分析」の対象となる。

ここでベンスラマは二重の転換を導入する。まず、文学、さらに一般的に文化創造の営みは「無罪」だろうか。その突端においてむしろ逆にすべからく「罪つくり」たるべく運命づけられていたのではないか。フィクションは現実を変容させるだけの恐るべき力を発揮する。それが虚構の真実の姿なのだ。そして作者自身がその犠牲とさえなりうる。ラシュディ自身、主人公の一人に語らせていた。「彼は自分が書いた『詩』のために死んでゆこうとしているが、自分に対する死刑宣告を不当なものと考えることはできなかった」と。それはなぜか。

第二の転換。なぜなら、よしラシュディの小説が冒瀆的であるにせよ、その冒瀆行為は「イスラームの名誉を傷つけるものではいささかもな」いからだ。ラシュディの思考は、あるイスラームの「精神的・想像的系譜」に根ざしうる。自分を神と同一視して処刑されたかのハッラージュ、また「西方流離」の神秘家スフラワルディー。かれらへと遡りうるこの系譜こそが「イスラームの名誉」であり、「イスラーム刷新の可能性をもたらす発想の源泉のひとつである」とまでベンスラマは考える。それは奇しくも、五十嵐一がイスラーム神秘主義の探求者たちに見いだした、あの「特異点の複合体」の織り成す光芒だ。『悪魔の詩』翻訳者の使命もまた、この系譜の末端に自らを位置付けることにあったろう。周囲の政治状況次第で「たとえ一身が朽ち果てるとも」なお「知的にその危機を切り抜けて行く特異点」たる、イスラーム知識人の命運がここに透視される。

イスラームの挑戦としての『悪魔の詩』

この大胆な提言に俄かに付いてゆけない読者もあろう。イスラームの精神風土とフランス語圏の知識人ならではの問題意識。その交点で成されたこの提言そのものが、日本の知的風土では容易には納得されまい。だが「ラシュディ事件」を引き金にぽっかりと口を開いた底無しの深淵に目をつぶることは、もはやベンスラマには許されない。この省察のうえで、どちらの陣営への帰属をも宙づりにして耐える思考の強度。おそらくはこの国がこの先なおそこから学ぶべき知的挑戦のありかが、ここには冷徹に指し示されている。

乱暴を承知で要約しよう。『クールアン』とは予言者が神からこれを「読め」と命じられた神の言葉とされる。アラビア語の「読め」は同時に教えを宣べ伝える、信徒としての務めでもある。だが突き詰めれば、「読む」ことによって、信徒はまた神の唯一性とは異質な、神ならぬ我が身に気づかされもしよう。

預

【2面Bへ……………】

日本古書通信
誌歴60年　趣味と実益の読書雑誌
1ヵ月 650円(送76円)・1年前金 7,800円(送共)
〒101 東京都千代田区神田小川町 3―22
見本誌進呈
電話 03(3292)0508　日本古書通信社

【B……………1面より】

唯一なるものが分割され、不可視なるものが可視となるや、両者の接合部には否応無く不連続線、さらには隙間が生じる。その綻び目に付け込むのが「悪魔」であり、「悪魔の詩」である。「啓典の民」のみならずモスレムといえども、つねにこの悪魔の誘惑に晒されている。そしてこの悪魔の詩に耳傾ける「失墜」こそ、西欧近代が自らに与えた権利であり自己規定でもあった。

そしてベンスラマによれば『悪魔の詩』冒頭の飛行機の爆発と主人公たちの落下こそ、この「失墜」の再演である。信仰共同体内部の盲目的運命から自らを切り離すことで、神からの自由を獲得する。だが、その代価として神から見捨てられ、堕落せる西欧への流離を運命づけられた流謫の孤児。この流謫の孤児の運命こそ、予言者の生涯の試練を再体験することにほかならない。そうした精神的苦悩を、西欧世界の移民・出稼ぎモスレムたちは共有している。そしてその精神現象学を具現しつつ、それを臨床的に描き尽くした反ビルドゥングス・ロマーンの作者が、贖罪の羊として選ばれた。まさに彼と同様の境涯を生きる数百万人の同朋たちの怒りを鎮めるために。

預

とすれば、この「小説」とその周囲に発生した「事件」との「符合」ぶりは常軌を逸する。一方で、西欧で通用するフィクションの免責契約は、その契約の起源から問い直される。「小説」でしかないなら何でも許される――どころか、大衆は「小説」だからこそ許さなかったのだ。逆にまたこの「事件」はファナティスムだとする説も退けられる。「文学」を知らぬ無学で文盲な大衆を都合よく動員した政治的・宗教的陰謀――ラシュディ自身与する、かような解釈は、事件の根源の深さに対する誤認でしかない。ベンスラマが「ラシュディ事件」に見いだすもの。それは、いわば「事件」が偶発的に発生した事後となってみれば、もはやとうてい偶発事として片付けるわけには行かなくなるこの「符合」――「狂気」の発生――である。

預知

予言者ムハンマドの生涯をなぞり書きして、イスラームの「起源」にまつわる「預言」を「虚構」化し、現代の風刺的寓意画へと鋳直した小説。その作為に「抗議」した人びとを動かしたのは、現実とフィクションとの混同でも、ジャンルに関する無知でもなく、まさしく起源についての小説というかたちをとった文学が、起源の小説家だ手をつけることを主張するかぎりは、転覆行為そのものだという確信なのである。」いまや分析さるべきは、こうして新たに捏造されてしまった「起源」を介してなかば自動的に口を開いた、無気味な深淵にほかならない。

化

ての出発点とも

分かたれた起源への問い

本書の副題には「起源の分有」とある。分かたれた起源、もはや起源たる唯一性を失効し、奪い合いの対象となり、不完全なものへと分割されてしまった起源。これは唯一の起源という虚構（起源はつねに自らの存在を作り出す限りにおいて虚構である）を挑発する側から見れば、定義として許されざる冒瀆であり挑発であり転覆行為である。だが本書冒頭に引かれたニーチェもいうとおり、「幻想の破壊が、ただちに真理の創造につながるわけではない」。むしろそれは新たな無知の断片を産み、さらなる混乱と空虚とを結果しかねない。起源にある真理とは、畢竟「人がそれなくしては生きてゆけない虚偽」やも知れぬ。それにもかかわらず、いやそれだからこそ――とラシュディは言う――「イスラームの〈歴史〉という大いなる物語に関する権力を誰が保持すべきなのかを知ること、そしてこの権力は万人に等分に属しているということ」が、この小説をめぐってなされた議論の、イスラム教徒も認めるに違いない唯一の目的だったのだ、と。

だが、この起源分有の試みは恐怖（テロル）によって迎えられ、イスラームを震撼させてしまう。それは、西欧とイスラームとの対立というよりは、むしろ今日イスラームがその内部で政治的に病気に犯されていることの証拠だとベンスラマは診断する。そしてプラトンを援用する。恐怖を武器とする専制とは、そのおよぼす暴力によってというよりも、むしろそれが「政治」なるものを消滅させるからこそ始末に負えないのだ、と。だからこそ、政治、文学、宗教という領域を縦割りに分権・分割して問題を解消しようとする西欧の発想に抗して、「それらすべてを取りまとめ、それらすべてを横断しているものが何なのか」を問うことが必須だった。そこでいかに根源の唯一なるものを分有することが可能なのか。この問いへのベンスラマの解答は必ずしも明確でない。だがこの問いは必然的に開かれたままだろう。我々の生きるのは、唯一の神が多数へと現象したその姿たる「世界」の中でしかない以上、不一致と不協和とを覚悟のうえで、その多数性をそれとして「分け持つこと」だけが、神の唯一なることを証しするために唯一人間に許された営みであるはずだからだ。（三重大学助教授・比較文化）